慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	インド大反乱と佐久間象山
Sub Title	The great mutiny in India and Zozan Sakuma
Author	古川, 学(Furukawa, Satoru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.55, No.4 (1986. 5) ,p.65(335)- 80(350)
JaLC DOI	
Abstract	The Great Mutiny in India (1857-1859), in addition to the Taiping Rebellion in China (1851-1864) and the Meiji Restoration in Japan (1868), was one of the largest nationalist movements in Asia. Zozan Sakuma in the Edo era, who studied Western sciences through Dutch, was in touch with current problems in foreign countries. In 1842 after the Opium War in China, he formulated eight policies for coastal defense and later, in 1853 he observed an American fleet visiting Japan and framed ten policies of urgent necessity. Both were submitted to the Tokugawa Shogunate. During the Taiping Rebellion, he asserted that it might influence Japan and that some British were participating in it. But after the occupation of Peking by the allied forces of Britain and France, he insisted that Japan should guard against British invasion and he further mentioned that every country in the world except Japan, at that time, was subject to constant civil rebellion. Townsend Harris, the American consul in Japan, assumed his post after the opening of Japan. In 1857 he claimed that he would deal wisely with a visit of the British fleet to Japan. This was a ploy to open trade with America. Zozan judged, however, that as a big war had arisen in Bengal, Britain would not be able to afford to send her fleet. He informed the Matsusiro clan of this only 24 days after the Indian uprising. When Harris demanded the commencement of trade and the establishment of a residence for the American minister in 1858, Zozan saw it as a strategy to colonize Japan, that is, it could be a means to warn of British invasion and to urge the signing of a treaty with America. His belief arose because Harris mentioned only the incident in China and did not reveal the Great Mutiny. This was also clearly shown by Harris' false reply saying, the Great Mutiny was over. In that year British and French ships visited the sea near Edo. Zozan had apprehensions that a visit of the British ships might be an attempt to compensate, in Japan, for the loss in the Great Mutiny. In 1857 Zozan regarded the Great Mutiny as a discord not only between the British colonial policy and the Indian people, but also as one which existed between Britain and Russia. Thus based on Harris' attitudes, Zozan became absolutely convinced of the substance and importance of the Great Mutiny, and sufficiently appreciated the serious damage Britain sustained from it. He therefore considered it in relation to the opening of Japan by America, and informed the Shogunate, his clan, acquaintances, and disciples of its serious influence on Japan. Zozan's knowledge of the state of affairs in foreign countries was acquired from a borrowed copy of the Dutch current report, and by collecting the information from his disciples in Nagasaki. On the basis of this data, he could pass rapid and precise judgement upon the Great Mutiny. Zozan, in order to formulate a culture which differed from China and the West, desired a harmonious unification of Eastern spiritual culture and Western material civilization. His words 'oriental spirit' included an element of the same spiritual value found in the Indian nationalist movement. Zozan was a man who carefully observed the progress of the nationalist movements in Asia, deepened his thought, and endeavoured to practice and diffuse it. He, himself, lived in the Meiji Restoration.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19860500-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

インド大反乱と佐久間象山

古川　学

一　はじめに
二　象山の対外認識
三　インド大反乱に関する象山の知識
四　象山の開国思想
五　おわりに

一　はじめに

近代におけるイギリスのアジア・アフリカに強行した植民地政策に対するインド民族の間に組織的に生じた抵抗として、一八五七―五九年に勃発した大反乱は、その性格・規模・内容並びに、直接近隣諸国に及ぼした影響力の顕著な点において、植民地独立運動を目指す被支配者の起こした反乱の代表的事件であった。植民地解放運動の嚆矢とも称すべきものである。従って、インドの大反乱が同じアジアの民族国家である極東の日本の国家及び民族に与えた影響と反応はいかなるものであったか。当時日本の国家統治の形態は、幕藩体制から明治維新へ移行する歴史的大変革期に直面していた時期である。

インドの大反乱が、中国の太平天国の乱や日本の明治維新と並び、東洋における近代社会を成立せしめた三大民族運動の一つであり、明治維新に間接的影響を及ぼしたことは、既に論じられていた。(1) その具体例として、幕末に東西の事情に精通した佐久間象山が、インド大反乱について言及したことが、丸山真男(2)、中村平治(3)、信夫清三郎(4)、内藤雅雄(5)の諸氏の研究の中に指摘された。また『増訂象山全集』(6)に所収されたその史料は、滝本誠一(7)、植手通有(8)両氏の校注と松浦玲(9)氏の訳にもある。

本稿では以上の諸研究の成果を踏まえ、象山のインド

大反乱に関する知識を、更に象山の『全集』の中にありながらもこれまで引用されることが無かった新史料にも基づき、これを総括的・系統的に叙述し、象山自身の学問体系と子弟及び知人関係の中に分析するものである。また象山の太平天国の乱に関する知識の深さもこれまで余り知られていないので[10]、ここに触れておきたい。

二　象山の対外認識

幕末において、勝海舟や吉田松陰、橋本左内、坂本龍馬、河合継之助等は、何れも信濃松代藩士佐久間象山（一八一一―六四）[11]の門人であり、象山の開国思想に大きく影響されたが、松陰が指導した松下村塾から輩出した高杉晋作や久坂玄瑞、更に中岡慎太郎は、松代へ赴き象山と直々会談し、その思想に傾倒していた。

象山の経歴は佐藤一斎（一七七二―一八五九）に朱子学を学び、江戸神田に象山書院を興し、後に蘭学・兵学を学んで東西の学問を究め、門下生のみならず、万人にその学問と知識を伝授した功績は特筆すべきものがある。

本来漢学者であった象山が蘭学に関心を深めるに至った動機は、全く偶発的な契機による。当時、徳川斉昭の推挙により大老水野忠邦の下に老中職に就いた松代藩主真田幸貫が、中国のアヘン戦争（一八四〇―四二）に西欧のアジア侵略の脅威を感じ、海防事務を主管する自己の顧問に象山を任じ、天保十三年（一八四二）からヨーロッパ諸国の事情を研究させ、それに基づいて国家防御の策を講じさせたことから始まる[12]。

先ず象山は、弘化元年（一八四四）六月より八ヶ月間、黒川良安（一八一七―九〇）に師事し改めて蘭学を学ぶに及び、直ちに西洋の知識を逸早く吸収し深く理解した。その事実は、安政五年（一八五八）漢詩人梁川星巌（一七八九―一八五八）に贈った書簡に、

全世界の形勢、コロンビュスが究理の力を以て新世界を見出し、コペルニキュスが地動の説を発明し、ネウトンが重力引力の実理を究知し、三大発明以来、万般の学術、皆其根柢を得、聊かも虚誕の筋なく、悉皆着実に相成[13]。

とあることからも明白であり、その他に、彼は土質の調査[14]、硝子の製造[15]、馬鈴薯[16]・人参[17]の栽培、種痘の実施[18]、西洋数学[19]、人造磁玦の製作[20]、地雷火の点火[21]等、自然科学の研究と実験の分野に極めて幅広くかつ緻密に分け入っていった。

アヘン戦争の結果、中国がイギリスに香港を割譲し広東等五港を開港したことは、強く象山を刺激し急拠対外防御の策を講ぜしむるに至った。

象山は、アヘン戦争直後の天保十三年（一八四二）十月に「海防八策」[22]を建て、内々に藩主でもある老中真田幸貫に提出[23]、翌十一月更にこれを詳論して幸貫に上書し、天下の大計八策を陳情した。

象山は、やがて外患の憂あることを予知し、防衛を怠れば敗戦の恥辱を受けると見て、これまでオランダ貿易に用いた銅の輸出を禁じ、それを洋式の大砲に鋳造し直し、更に多数の洋式軍艦をも建造し強大な海軍の編成を志し、国防への準備を国家の急務と説いた。旧来幕府の政策であった洋式軍艦建造の禁止は、時代遅れとしてこれを撤回すべきことを主張した。

その後、象山は嘉永六年（一八五三）六月、ペリーの率いるアメリカ艦隊の浦賀来航の報を聞くや、直ちに藩主真田幸教[24]に建議して自ら浦賀の視察を遂げ、藩邸には武器を備え、藩の軍議役となって藩地より出兵の計画を建てた。

ペリー帰国後、翌年の再来に備えるべき方法として、象山は勘定奉行川路聖謨を介して老中安部正弘に上書し、軍艦建造と砲台建設により陸海軍を創設し、志気を鼓舞する国防論「急務十条」[25]を陳情した。

しかし、これら国家軍備強化の建策は、何れも幕府に容れられなかった。

当時の激変する世界の動向の中で、中国の太平天国の乱（一八五一―六四）も象山には日本と無縁のものとは考えられなかった。安政元年（一八五四）四月二十七日に松代藩の元側役頭取山寺常山（源太夫、一八〇七―七八）と絵師三村晴山に宛てた書簡に、

此節、清の天徳の乱も彼此風聞は候へども、慥なる事わかりかね候。むかし、元の忽必烈志を得候へば、我に弘安の乱有之候。唐山の兵乱は我国に甚敷関係も候事に候へば、是又差向き探索申度[26]。

とあり、太平天国の乱が日本に及ぼす影響を憂いた。

その後、太平天国の乱の実態が次第に明白になるに及び、安政四年八月二十五日に勝海舟（一八二三―九九）に宛てた書簡には、

清商之呈に拠り候へば、国中の乱も十中七八、掃平など相見え候へども、金陵を復し候にも至らず、又、英国と兵を結び候ては、此末如何成ゆき候はん歟。尚、甚気遣はしきものに御座候[27]。

とみえ、金陵（南京）を都とした反乱が、清朝に鎮圧されつつも、依然として南京を占領していた状況を述べ、太平天国の乱に参加したイギリス人の存在に懸念の気持を抱いたが、反乱に介入した外国人は極めて少数に限られ、大勢に影響を及ぼしてはいない。

事実、十二月三日に山寺常山に宛てた書簡には、

当時、南京の陥り居り候は、清の国内の賊の為にて、英には無之。先年英との戦争に南京を被取候と申事、犯境録中など見及不申、甚難受事に有之候。[28]

とあり、南京の陥落が全く清の国内の反乱によるものであり、イギリスとは無関係であることを明確に意識した。

しかし、アロー戦争（一八五六―六〇）によって、英仏連合軍は咸豊十年（一八六〇）八月北塘に上陸し、天津を占領して、九月清朝の都北京に迫った。

象山はこの万延元年十二月十九日と思われる斉藤友衛に宛てた書簡に、

清国順天府（北京帝都）をも、当八月中、英仏国の兵の為に陥られ候等の義に聞懼致し居り候に付、急にこれを救ひ候の策なくんばあるべからずと、存じ御内話も仕候義に御座候。[29]

と記し、北京が英仏連合軍によって占領された（十月十三日）事実を知り、やがて文久二年（一八六二）幕府にも上書を提出し、警句を発した。上書の文は「其頃、英国の兵、清朝を騒がし候」[30]とあり、イギリス軍の侵略を警戒させた。太平天国による南京陥落にはイギリスは介入せずとみたが、北京陥落はイギリスが行ったアジア侵略とみなし、これに警句を発した。中国内部の複雑な情勢に対するその洞察力は極めて鋭い。

安政五年（一八五八）正月十五日に藩老に提出した草案には、「当今の世、太平はただ本邦のみにて、其他世界万国兵乱絶えざる時節」[31]と記し、十九世紀半ばの世界が恐るべき兵乱の世であることを伝えた。

三　インド大反乱に関する象山の知識

知識人としての象山の真価は、そのインド認識において最も強く示される。アヘン戦争後の弘化二年（一八四五）七月に長崎に一隻のイギリス船が入港した際、象山は松代藩郡奉行山寺常山に宛てた書簡に、これが「英吉利の本国船には無之、多分は、アラカン辺の賊船の、此節、本邦にて英夷を憚り候」[32]と指摘し、イギリス東インド会社によるインド支配の東端がアラカン山脈であるこ

とを既に知っていた。

象山のインド認識は安政年間には更に深まる。安政元年（一八五四）に締結された日米和親条約に基づき、駐日アメリカ総領事として着任したハリスは、折しも中国とイギリス・フランスとの間で勃発したアロー戦争を利用して通商を迫ったが、象山は藩老望月主水に贈った安政四年（一八五七）六月四日と思われる書簡に、

将、今朝、御伝聞御座候へば、英船多々参り可申。然る所、墨使、都下に居合候事に付、如何様共取計ひ、争戦に不及候様可致候と申候よしの事、承知候や。御下問に御座候処、未だ承不申。但、愚意には、英船多々可参等の事は、此度、墨使申立の書付より、誤り伝へ候ものにも可有之歟と、被相察候。此節、英領ベンガラ（ママ）にて、余程の戦争有之候様子に付、当節、本邦へ軍艦を仕向候等の事に及び難き形勢と、被存候。[33]

とあり、「墨使」即ちアメリカ総領事ハリスはたとえイギリス船が数多く来航しようとも、自分のいる限りどの様にでも善処することができると申し立てたが、象山はこの時英領ベンガルではかなり大規模な戦争状態が生じ、イギリスが日本へ軍艦を送る余裕は無いと判断したのである。

英領ベンガルで反乱が最初に勃発したのは、一八五七年五月十日、デリー北のメーラトであった。その後反乱は北インドの広汎な地域に及んだが、象山は勃発後僅か二十四日の間に、松代にあってそれを知り得ていた。もっとも書簡にある日付は唯「四日」とあり、頭注で「安政四年六月四日か」とある訳だが、この日付が正しいとすれば、象山が反乱を知るのに要した時間は当時としては頗る驚異的である。

ハリスはこの年十月二十六日に幕府に通商を求める申し立てを行い、[34]幕府はこれを受けて十二月二日に貿易の開始と公使の駐在を承認した。[35]しかしながら、幕府は十二月十五日に諸大名・旗本にこれに関する意見を求めてはいたが、[36]翌安政五年（一八五八）三月二十六日朝廷の勅命が幕府に下り、条約締結が禁じられるに至り、[37]幕府は再び諮問した。[38]安政元年のペリー再来の際吉田松陰（一八三〇―五九）が起こした米艦渡航事件に連座し松代に蟄居中の象山は、安政五年四月にハリスとの交渉方法に関する上書[39]を認め、これを藩老望月主水に献策し、藩主真田幸教の名で幕府に建議を企てた。[40]しかし、幸教はそれを山寺常山の名に代えて、海防掛川路聖謨や岩瀬

忠震に紹介した。その建議は結局用いられなかったが、[41]象山が説くハリスの真意とは、

御国の腹背頭脳至要之地に、貿易の場を開き、ミニストルを置きつけ、朝廷の御政権を控制し、遂に属国同様に致し可申策略にて、只、顧欺瞞恐嚇の説を[42]説け、其所領を成就し候様巧み候ものと、ご被察候。

とあり、象山は貿易開始とミニストル（公使）駐在に関して、日本を属国にするための策略とみなした。その理由として挙げた不審は、六年前のペリー来航の際、[43]アメリカといえども軍艦・兵器を用意していたこと、アメリカとの条約にはアヘン厳禁を明記したが、イギリスには如何なる条約も効無く、強引にアヘンを持ち込む可能性があると推察したことの他に、次の不審を挙げた。即ち、[44]

英国と唐国との取合の事は、喋々しく被申陳候。印度英領デリー大乱は、何故一切口を開かず候哉。是、全く恐嚇の意思に相碍り候故の事に、可有之候。[45]

と。象山は、ハリスが英中両国の戦闘状態について詳しく言及しながらも、英領デリーにおけるインド大反乱に関しては全く口外しなかったことを、イギリスの軍事的侵入を日本に警告し、同時にアメリカの条約締結を急がせる手段とみなした。

その事実は、象山から海舟に宛てた同年五月十四日の次の書簡によって、一層明白である。

亜使申立の箇条も、詞理矛盾いたし、其上英領デリーの擾乱等の事、一切不申出候て、ひたすら英国の強有力を主張し候て、朝廷を奉脅其所願を成就し候はむ計画、歴然として弁ふべからず候所、其詞理の矛盾候廉、御詰問も一切無之、彼れの申す所に被為仕候御事、去りとは解すべからず候義に御座候。右等怪しむべき廉と被存候をも、総て御信容は無御座候へども、時勢已むことを得ずと、御観念御座候ての御事歟、何分相分りかね候義に御座候。使君には、亜使申立の条々、如何被思食候や。定て、御識破可被成御座候御事と、奉存候。[46]

以上に明記するように、象山には、ハリスが申し立てた条項は言葉・筋書共に矛盾し、しかもインド大反乱に触れることなく、唯イギリスの強大な力を誇張し、朝廷威嚇の策略を成功させようとする計画は明らかであり、また大反乱の事情を尋ねても、唯行なわれたと触れるだけで、既にそれが終結したという答弁に一層不審を懐いた。

大反乱は一八五七年九月二十日にデリーの鎮圧を見、

翌年三月二十一日には、その最大の拠点地ラクナウも陥落したが、象山は、その年代と日時から考察する限り、既に反乱の下火になった時点の情報まで承知していた。しかし、象山の「デリーの擾乱」の記事にあるデリーという固有名詞から考察すれば、象山は一八五七年九月二十日以前の反乱の最も激しかった時期のことを述べている。しかも、ハリスが既に終結したと述べた大反乱が、実際には小規模な局地戦の様相に縮小したとはいえ、一八五九年まで持続しており、象山の疑いは正しく的中していた。

象山は、同年六月二十七日に山寺常山に宛てた次の書簡に、

条約調印七月下旬迄の日延に相成候に付、亜人も一度下田を去り、唐山地方の用向相弁じ候為に、出航候なども風聞候が、果して左様の義も候はゞ、今度英仏船江府附近に突来候は、亜人の奸謀に出で、右両国の船の唐山地方に有之候を、やとひ来候に可有之。もし、しからずして、英仏本国より発し候使船に候ては、此度の掛合は、実に容易なるまじく、恐らくは印度地デリーの償ひも、本邦にて収入候はむなどの企には、無之候やと、気遣ひ候義に御座候。御公案も候はゞ、相伺度奉存候。(47)

と記した。

幕府は同年六月十九日、ハリスとの間に日米修好通商条約を締結し、貿易の自由を認め、本格的開国に踏み切り、七月にはオランダ（十日）、ロシア（十一日）、イギリス（十八日）と、九月三日にはフランスとも条約を結んだが、象山の常山への書簡は、日米修好通商条約締結後、他のイギリスやフランスが条約締結を幕府に迫った時期に相当する。

象山は、イギリスとフランスの船が江戸近海に突然来航したことに関して、それがアメリカの陰謀から生じたものであって、イギリスやフランスの船が「唐山」即ち中国にいたものを雇って来たのに相違ないと考え、もしイギリスやフランスの船がその本国から直接に日本に来航したならば、この度の交渉は誠に容易ではなく、特にイギリス船の来航がインドにおいて大反乱で被ったその損害を日本で償うための企てではなかろうかと危惧し、常山に伺いを建てた。

象山には大反乱を単なるイギリスの植民地政策との確執とみなすだけでなく、更に広い世界的視野から捉える考えが存在した。反乱後四ヶ月半経過した安政四年（一

八五七）八月二十二日に、海舟に宛てた象山の書簡には、次のように記された。

魯西亜の密計にて、搒葛刺（ママ）の乱を嗾起し候は、差向き本邦の大幸と不思議に存申候。六万の衆と申す上に、久しく英国に属し候地に候へば、伎倆も中々に可有之左候へば、早速掃蕩にも至り申間敷被存候。何とぞ其間に、文具に無之、真正之御武備之相立候様仕度ものと、奉禱祈候義に御座候。[48]

当時の世界情勢から判断し、イギリスの植民地政策と対峙するものとして、ロシアの南下政策を取り上げ、その対立関係の中でベンガル（榜葛刺）の大反乱を取り上げたことは注目すべき見解であった。

イギリスとロシアの対決の一つであったクリミア戦争（一八五三―五六）についても、象山は熟知していた。その事実は、安政三年（一八五六）七月二十一日に松代の菅鉞太郎へ宛てた書簡に、

昨便、江府さる方より内々申来り候は、魯西亜とトルコの戦争も当二月中弥和睦に相成候由、当節長崎へ参り居候カピタン時々申出候は、ロシアとトルコの戦争は日本の為には天幸と可申、此隙に兵備御整に相成候様有御座度、自然右戦争和議に相成候時は、英吉利必日本へ手を出し可申候間、若是迄の通怠緩の御沙汰に候時は、禍近きに可有之と申居候処、果して近日長崎へ英船渡来、魯西亜トルコ和議相調候に付ては、別段改て使節を参らすべきにて候と申断り、直に出帆致し候。[49]

とみえ、広い情報網から得た通報によって、カピタン（長崎のオランダ商館長）が幕府に行なった海外報告阿蘭陀風説書に接した。

山寺常山に同年三月七日に宛てた書簡には、「一風説書半下（ママ）、御借与被成下奉銘謝候、前半をば則奉完趙候」[50]とあり、阿蘭陀風説書の前半を借用しそれを読了し、翌四年正月には読み残した後半について、「昨年拝借残り説書下半も、御写しに相成候はゞ、是又拝借奉冀候」[51]と記し、未だ見ていない後半の写しの借用を頼み、同年閏五月二十一日には、「過日、拝借仕候風説書下半も漸卒業に相成候に付、五老集右別条一同完趙仕候」[52]とみえ、その後半も読了したことからも、象山の阿蘭陀風説書借用の様子が良く窺われる。

門人の中でも、安政二―六年に長崎の海軍伝習所にいた海舟は、太平天国の乱に関する情報を象山に知らせた。象山が海舟に宛てた安政四年八月二十二日の書簡に、「清

商の呈稟、幷に六合叢談抄、御写させ御送り被成下乍、毎度、御深情不浅、難有奉多謝候」[53]と礼を述べ、その情報提供が度々行なわれていたことが歴然とする。

象山のインド大反乱に関する知識は、阿蘭陀風説書の写しを知人より借用し、或いは長崎等にいて海外の情報に接した門人よりその情報を獲得し、それらの情報に基づいて、大反乱に対する迅速且つ的確な判断を下した。

このように獲得した情報に従って、象山は、ハリスがインド大反乱に関して日本に何も告げず、ひたすらアロー戦争に関してのみ知らせた事実こそ、アメリカが日本を籠絡する手段として、イギリスのアジア侵略の意図を誇張し、イギリスへの警戒心を高め、自国の条約締結を推進する方策に他ならないと考えたが、換言すれば、ハリスの態度から、象山は逆に大反乱の実態とその重要性を厳しく察知したといえる。また彼はイギリスが大反乱によって蒙った損害の甚大さをも十分に理解していたのである。

四　象山の開国思想

アヘン戦争当時、攘夷論を唱えた象山は、自らの蘭学研究の深化と共に、当時の日本を取り巻く世界情勢の変化につれて、その思想を攘夷から開国へと転じていった。具体的には、ペリーの再来では松陰を海外へ渡航させようと画策し、海外へ有望な人材を派遣して西欧の生きた知識を実地体験させることを嘱望し、また開港に当っては、その最適地として下田ではなく横浜を第一に主張した。[54] しかし、象山の脳裏には、アロー戦争や太平天国の乱、更にインド大反乱の実態によって、西欧のアジア侵略の脅威を強く感じ取っていた。

象山の開国思想への萌芽は、弘化元年（一八四四）の詩文に「漢土興欧羅。於我倶殊域」とみえ、日本は中国・西欧とも異なるが、諸外国から「取善自補翊。彼美固可参。其瑕何須匿」[55]としてその文化の長所を摂取すべきことを説いた。

同趣旨のものは、安政六年（一八五九）に佐藤一斉の遺墨に寄せる文中に「漢人所未窮知。則以欧羅巴之説補之」[56]とあり、中国文化に欠けるところを西欧のそれに求めた。

西洋の学と東洋の学とに関して、象山が安政元年（一八五四）に小林又兵衛に宛てたといわれる書簡は、

漢土の学のみにては、空疎の議を免れず。又、西洋の学ばかりにては、道徳義理の講究無之候。……（中

略）……是を合併候にあらざれば、完全の事とは致し難く候。

と記し、「東洋道徳西洋芸。匡廓相依完圏模。大地周囲一万里。還須虧得半隅無」の詩を贈り、その意は、

道徳芸術相済い候事。譬えば亜細亜も欧羅巴も、合せて地球を成し候如くにて、一隅を欠き候ては円形を成し不申候。その如く道徳芸術一を欠き候ては、完全の者にあらず。[57]

との意向を示した。

彼には同年著わした『省譬録』の中に、「東洋道徳。西洋芸術。精粗不遺。表裏兼該。因以沢民物。報国恩」[58]の一文がある。東洋道徳とは易経を、西洋芸術とは科学を指す。このように、象山が東西の学術を併せ修めたことは、幼少より学び造詣の深い易の理論と、後に修めた西洋科学の理論とを融和し、これを一つに統合したことによる。[59]即ち、東洋の精神文化と西洋の物質文化との融合・一体化こそ、象山の開国思想の重要な根底をなすものであった。

しかし、象山の開国の意図は、西洋の学問・芸術・文化の摂取と交易による西洋の近代的物資の輸入に着目したのであって、あくまでも西欧の植民地支配となることを一切好まず、西洋の兵学と最新式武器の導入とによって国防を固めつつ開国し、西洋の長所を摂取することを目論んだものであった。インド大反乱は同じアジアの日本が西欧に勝る防御を果たしうるとの確信を抱かせるに至った。インド大反乱は、国防を強化し開国するという象山の思想形成の過程において重要な契機を与えたものであり、その後の日本の動向は正しく象山の推察に則したものとなった。そして、象山の説く「東洋道徳」の中には、インドの民族運動の持つ精神的価値の一側面が含まれていると考えることもできる。

五　おわりに

漢学と蘭学、二つの外国の学問を究めた象山は、外国への関心も実に広範囲に渉り、[60]中国、ヨーロッパ、南北アメリカの他に、[61]アフリカからトルコ、インド、ジャワ[62]を経て、オーストラリア、[63]ニュージーランド[64]に至るまで、世界のあらゆる地域に及んだ。インドへの関心も従来の仏教中心の日本人のインド観とは全く異なり、象山のインド観は、イギリスの植民地支配にあったインドの実情、とりわけイギリスの植民地支配に抵抗するインドの民族に視点を置いた。それは一旦西欧に屈したアジア

の同胞がその西欧に敢然と立ち向う姿に対する共感と敬意であり、鎖国から開国へと一変する当時の日本の置かれた特殊な国情が、必然に導き出したものでもあった。

幕末期に太平天国の乱に関する知識を持った日本人は、海舟、松陰を始め、高杉晋作、久坂玄瑞、福沢諭吉等多数いたが、インド大反乱まで的確に知り得たのは日本国内に象山一人であり、しかも象山は太平天国の乱、アロー戦争、更にはクリミア戦争まで熟知していた極めて稀な存在であった。象山はアジアの民族運動の推移に目を配りつつ、その思想を深化し実践普及に努め、自ら明治維新に生きた人間であった。

不幸にも、象山はその開国論の故に暗殺される結果を帰たしたが、その意志は海舟や坂本龍馬等の門弟や、松陰の下に学んだ象山の孫弟子達によって見事に結実したのである。(65)

註

(1) 羽仁五郎「東洋に於ける資本主義の形成」『史学雑誌』第四三巻第二、三、六、八号、昭和七年。同『東洋に於ける資本主義の形成』所収、三一書房、昭和二十三年。同『明治維新史研究』再所収、岩波書店、昭和三十一年。

尚、インド大反乱と太平天国の乱との関係についての研究には、次のものがある。

Yu Sheng-Wu〔余繩武〕and Chang Chen-Kun〔張振鵾〕, "China and India in the Mid-19th Century", in P.C.Joshi (ed.), *Rebellion 1857, a Symposium*, People's Publishing House, New Delhi, 1957.

高畠稔「P、C、ジョーシ編『一八五七年の反乱にかんする論文集』P.C.Joshi ed.: *Rebellion 1857, a Symposium*, New Delhi, 1957. viii+355——一八五七—五八年の反乱をめぐるインド歴史学界の動向——(2)」『南方史研究』第二号、昭和三十五年。

野原四郎「極東をめぐる国際関係」『岩波講座　日本歴史』14、岩波書店、一九六三年。

中村平治「インド現代史と東アジア」『歴史学研究』二七六号、一九六三年。

鈴木正四「アジア・アフリカ民族運動の研究と日中学術交流」『歴史評論』一五九号、一九六三年。

中村平治「インド民族運動の展開と東アジア」坂野正高・衛藤瀋吉編『中国をめぐる国際政治——影像と現実——』東京大学出版会、一九六八年。

佐伯有一「アジアにおける近代」『岩波講座　世界歴史』21、岩波書店、一九七一年。

中村平治「インド民族運動の展開と東アジア」『現代インド政治史研究』東京大学出版会、一九八一年。

また太平天国の乱と明治維新との関係についての主要な研究には、次のものがある。

増井経夫「太平天国史話」『東亜問題』第二巻第一号、昭和十五年。
杜氏嘉造「太平天国とわが遣清使節」『東洋史研究』第七巻第五号、昭和十七年。
増井経夫「太平天国時代——日本の資料を通じて——」『新中国』第十七号、昭和二十二年。
増井経夫「太平天国に対する日本人の知識」『太平天国』岩波書店、一九五一年。
市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」開国百年記念文化事業会編『開国百年記念明治文化論集』乾元社、昭和二十七年。
野原四郎「太平天国の乱と幕末日本」『中央公論』第七七年第二号、通巻八九一号、昭和三十七年。
小島晋治「太平天国と日本——水戸藩のある庄屋の『見聞録』の記事にふれて——」『水戸論叢』3、一九六六年。
和田博徳「福沢諭吉の『清英交際始末』とアロー戦争・太平天国」『史学』第四十巻第二・三号、昭和四十二年。
小島晋治「太平天国と日本——『明治百年』によせて——」『高校資料（社会）』五—八、一九六七年。
衛藤瀋吉「日本人の中国観——高杉晋作らの場合——」『日本法とアジア』仁井田陞博士追悼論文集第三巻、勁草書房、一九七〇年。
市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」『近代中国の政治と社会』東京大学出版会、一九七一年。
増井経夫「太平天国時代——日本の資料を通じて——」『中国の歴史と民衆』吉川弘文館、一九七二年。
増田渉「『満清紀事』とその筆者——わが国に伝えられた『太平天国』について——」鳥居久靖先生華甲記念論集『中国の言語と文学』鳥居久靖教授華甲記念会、一九七二年。
中村新太郎「太平天国と高杉晋作」『日本と中国の二千年人物・文化交流ものがたり』下、東邦出版社、昭和四十八年。
増田渉「日中文化関係史の一面」関西大学生協組織部編『書評』34～40、一九七五—七六年。
増井経夫「太平天国に対する日本人の知識」『中国の二つの悲劇　アヘン戦争と太平天国』研文出版、一九七八年。
小島晋治「太平天国と日本——『明治百年』によせて——」『アジアからみた近代日本』亜紀書房、一九七八年。
小島晋治「幕末日本と太平天国——水戸藩のある庄屋の『見聞録』の記事にふれて——」『太平天国革命の歴史と思想』研文出版、一九七八年。

中村新太郎「太平天国と高杉晋作」『日本と中国の二千年――人物・文化交流ものがたり――』中、東邦選書、一九七八年。
増田渉「日中文化関係史の一面」『西学東漸と中国事情――「雑書」礼記――』岩波書店、一九七九年。
白川知多「太平天国関係文献目録」『史学』第四十九巻第四号、一九八〇年参照。

(2) 丸山真男「幕末における視座の変革――佐久間象山の場合――」『展望』第七十七号、筑摩書房、一九六五年、三十頁。

(3) 中村平治「インド民族運動の展開と東アジア」前掲論文、二四三頁。同『現代インド政治史研究』前掲書、一六七頁。

(4) 信夫清三郎『象山と松陰――開国と攘夷の論理――』河出書房新社、一九七五年、二八一頁。

(5) 内藤雅雄「幕末の動乱期のインド観」大形孝平編『日本とインド』三省堂選書、一九七八年、三〇頁。

(6) 信濃教育会『増訂象山全集』信濃毎日新聞株式会社、巻一、二、三、昭和九年。巻四、五、昭和十年。

(7) 滝本誠一編纂『日本経済大典』第四十六巻、啓明社、昭和五年、四六五頁。

(8) 横手通有校注「佐久間象山」佐藤昌介、横手通有、山口宗之校注『渡辺崋山、高野長英、佐久間象山、横井小楠、橋本佐内』日本思想大系55、岩波書店、一九七一年、二九七頁。

(9) 松浦玲編・訳『佐久間象山　横井小楠』日本の名著30、中央公論社、昭和四十五年、二五八頁。

(10) 横手通有校注「佐久間象山」前掲書、三五四頁。小尾郊一「佐久間象山」高畑常信・小尾郊一『大塩中斎・佐久間象山』叢書・日本の思想家38、明徳出版社、昭和五十六年、二〇〇頁。

(11) 象山に関する主要な研究には、次のものがある。宮本仲『佐久間象山』岩波書店、昭和七年。同、解題奈良本辰也『佐久間象山』岩波版増補版復刻、象山社、昭和五十四年。
飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」『増訂象山全集』巻一。
大平喜間多『佐久間象山』人物叢書23、日本歴史学会編、吉川弘文館、昭和三十四年。
丸山真男「幕末における視座の変革――佐久間象山の場合」前掲論文。
松浦玲「思想のゆくえ――思想は政治となりうるか」同編『佐久間象山　横井小楠』前掲書。
奈良本辰也、左方郁子『佐久間象山』人と思想48、清水書院、昭和五十年。
信夫清三郎『象山と松陰――開国と攘夷の論理――』前掲書。
龍野咲人『佐久間象山』新人物往来社、昭和五十年。
前澤英雄編『佐久間象山』財団法人　象山神社奉賛維持

会、昭和五十四年。
小尾効一「佐久間象山」高畑常信・小尾効一『大塩中斎・佐久間象山』前掲書。
田中誠三郎『佐久間象山の実像』研究・資料シリーズ5、銀河書房、昭和五十八年。
井出孫六『杏花爛漫　小説佐久間象山』上下巻、朝日新聞社、一九八三年。
前澤英雄『佐久間象山の生涯』財団法人　象山神社奉賛維持会、昭和五十九年。
(12) 飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」前出、一〇頁。
(13) 『増訂象山全集』巻五、書簡七六〇、九—十頁。
(14) 『増訂象山全集』巻三、書簡一二六、二五九頁。
(15) 同上書、書簡一二七、二六一頁。
(16) 同上書、書簡一五〇、三三三頁。
(17) 『増訂象山全集』巻二、鞜野日記、三頁。巻三、書簡二五四、四九〇頁。
(18) 『増訂象山全集』巻三、書簡二六一、五〇二—五〇三頁。巻五、書簡八五五、一四八—一四九頁。
(19) 『増訂象山全集』巻四、書簡六三八、四五六頁。
(20) 『増訂象山全集』巻五、書簡七八七、七八八、七八九、六五—六六、六七、六八頁。
(21) 『増訂象山全集』巻五、書簡七九九、八三—八五頁。
(22) 海防八策
其一、諸国海岸要害之所、厳重に砲台を築き、平常大砲を備え置き、緩急の事に応じ候様仕度候事。
其二、阿蘭陀交易に銅を被差遣候事暫御停止に相成、右の銅を以て西洋製に倣ひ、数百千門の大砲を鋳立、諸方に御分配有之度候事。
其三、西洋の製に倣ひ、堅固の大船を作り、江戸御廻米に難破船無之様仕度候事。
其四、海運御取締の儀、御人選を以て被仰付、異国人と通商は勿論、海上万端の奸猾、厳敷御糾し有御座候事。
其五、洋製に倣ひ、船艦を造り、専ら水軍の駆引を習はせ申度候事。
其六、辺鄙の浦々里々に至り候迄、学校を興し、教化を盛に仕、愚夫愚婦迄も忠孝節義を弁へ候様仕度候事。
其七、御賞罰弥明に、御威恩益顕れ、民心愈団結仕候様仕度候事。
其八、貢士の法起し申度事。
（『増訂象山全集』巻二、上書、三五頁。）
(23) 『増訂象山全集』巻三、書簡一〇〇、二一七頁。
(24) 真田幸貫は、弘化元年（一八四四）老中を辞し、嘉永五年（一八五二）病歿した。幸貫の嫡孫に当たる幸教は、十九歳で藩主を継承した。
(25) 急務十条
其一、堅固の船を備へ、水軍を練るべき事。

其二、城東の砲台を新築し、相房の砲台を改築すべき事。
其三、志気精鋭筋骨強壮の者を選び、大砲隊を編成すべき事。
其四、慶安度の軍制を改正すべき事。
其五、砲政を定め、広く硝田を開くべき事。
其六、警急の為め将材を選ぶべき事。
其七、其短を捨て其長を用ひ、其名に循はず其実を講ずべき事。
其八、綱紀を正し、志気を振ふべき事。
其九、大小銃を演習し、四時間断なからしむる事。
其十、諸藩海防人数聯事の法を以て編成すべき事。
（『増訂象山全集』巻二、補遺、三頁。）

(26) 『増訂象山全集』巻四、書簡五一三、二五七頁。本史料は、横手氏の校注にもあり、また小尾氏も使用された。註（10）参照。
(27) 同上書、書簡七〇六、五九四頁。
(28) 同上書、書簡七三〇、六四三頁。
(29) 『増訂象山全集』巻五、書簡九三二、二五八頁。
(30) 『増訂象山全集』巻二、上書、一六四頁。
(31) 同上書、上書、一三〇頁。
(32) 『増訂象山全集』巻三、書簡一五六、三五三頁。
(33) 『増訂象山全集』巻四、書簡六九七、五六六頁。
(34) 『増訂象山全集』巻二、上書、一三九頁。
(35) 同上書、上書、一三六頁。
(36) 同上書、上書、一三五頁。
(37) 飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」前出、三六頁。
(38) 『増訂象山全集』巻二、上書、一三六頁。
(39) 本史料は『全集』の他に、滝本、植手両氏の校注、松浦氏の訳にもある。註（7）（8）（9）参照。
(40) 飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」前出、三六頁。
(41) 同上書、三七頁。
(42) 『増訂象山全集』巻二、上書、一三六—一三七頁。
(43) 同上書、上書、一四二頁。
(44) 同上書、上書、一四三頁。
(45) 同上書。本史料は、信夫、内藤両氏も使用された。註（4）（5）参照。
(46) 『増訂象山全集』巻五、書簡七七八、四八—四九頁。本史料は、丸山、中村両氏も使用された。註（2）（3）参照。
(47) 同上書、書簡七八七、六四—六五頁。本史料は、丸山、中村両氏も使用された。註（2）（3）参照。
(48) 『増訂象山全集』巻四、書簡七〇六、五九五—五九六頁。
(49) 同上書、書簡六五七、五一三頁。
(50) 同上書、書簡六三〇、四四三頁。
(51) 同上書、書簡六七〇、五三四頁。
(52) 同上書、書簡六九三、五六〇—五六一頁。

(53) 同上書、書簡七〇六、五九四頁。
(54) 『増訂象山全集』巻一、省譽録、一七頁。
(55) 『増訂象山全集』巻二、象山先生詩鈔、上、十二―十三頁。巻三、書簡一二六、二六〇頁。
(56) 『増訂象山全集』巻一、文稿、題跋類、四七頁。
(57) 『増訂象山全集』巻四、書簡五〇六、二四二―二四三頁。
(58) 『増訂象山全集』巻一、省譽録、五頁。
(59) 飯島忠夫「佐久間象山先生小伝」前出、二三頁。
(60) 『増訂象山全集』巻二、上書、二八頁。巻四、書簡四六三、一五一頁。巻五、書簡一二二三、一二二七、六二〇、六二三頁。
(61) 『増訂象山全集』巻三、書簡九七、二〇七頁。
(62) 『増訂象山全集』巻二、上書、一四六、一六八頁。巻五、書簡七七八、四八頁。
(63) 『増訂象山全集』巻三、書簡九七、二〇七頁。
(64) 『増訂象山全集』巻五、書簡一一七八、五八〇頁。
(65) 象山には三男一女がいたが、二男以外は夭逝した。次男恪二郎（一八四八―七七）は明治四―六年に慶應義塾に学び、東京と松山で判事となったが、恪二郎の死去により象山の血脈は絶えた。（宮本仲『佐久間象山』前掲書、六四一―六四九頁。田中誠三郎『佐久間象山の実像』前掲書、一三七―一四三頁。前澤英雄『佐久間象山の生涯』前掲書、一五九―一六一頁。）

付記

本稿及び続稿（次号掲載予定）は、和田博徳教授の御指導の下で、昭和五十三年に提出した修士論文の一部を書き改めたものである。ここに記して心から感謝の意を表する次第である。